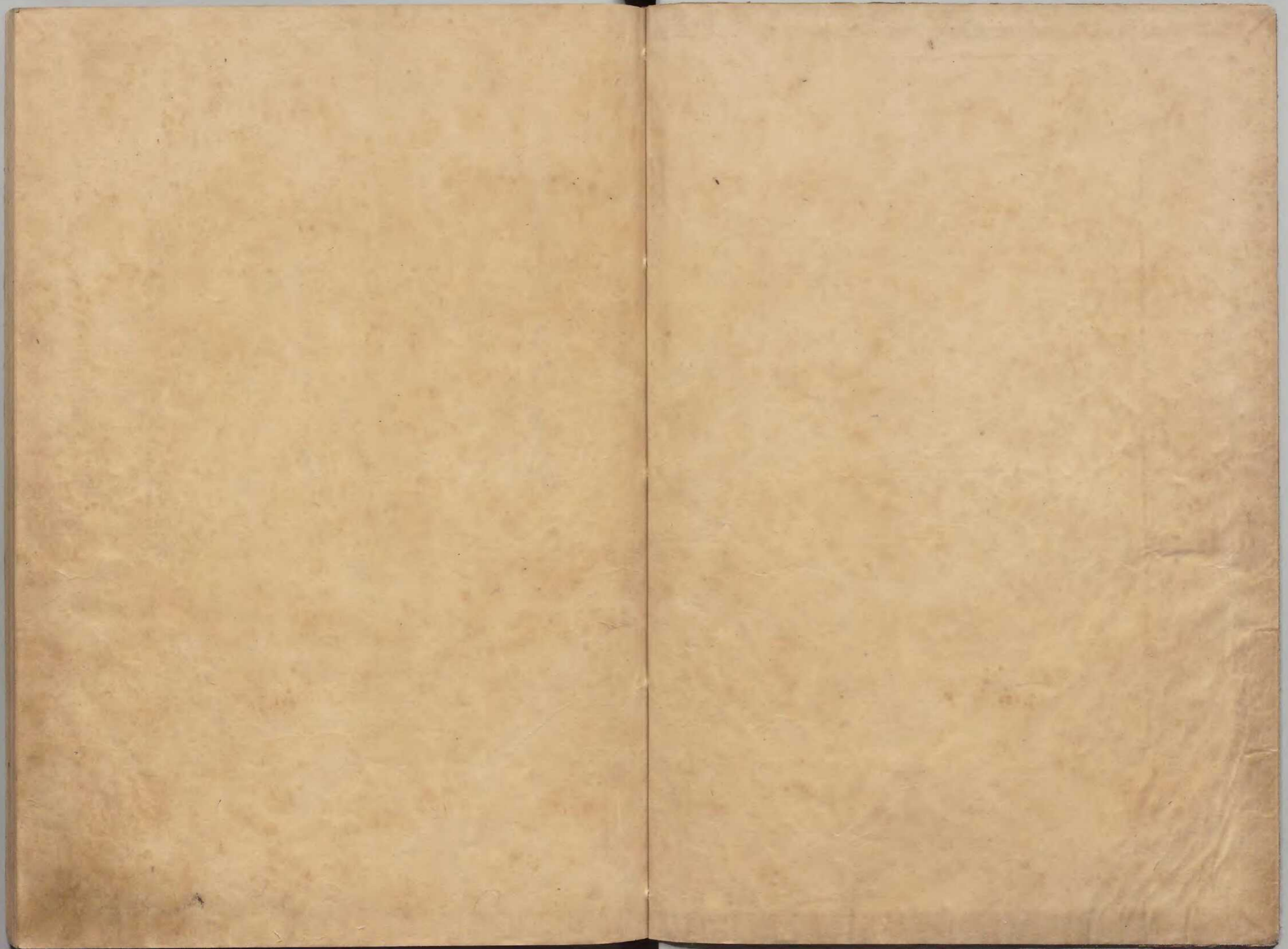


寛永諸家譜

宇多源氏
七卷之内

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(151)
函號 特 76 1





黒田

間文

本村

寛永諸家系圖傳

宇多源氏

黒田

淺草文庫

依よ本もと乃の族うぢなり識し隆りゆうくく小こ寺てら
 氏うぢここなり小こ寺てらハハ村むらと源げん氏うぢ赤あか松まつ此こゝ族うぢな
 り孝かう高たかりりししくく黒くろ田だ乃の本もと氏うぢ
 入い向むかるる忠ちゆう之のくくくく松まつ平へい此こゝ梅うめ号ごう
 とと本もと乃の

宇多天皇八代

● 秀義 ひでよし

佐々木三郎

六條の判官為義猶子となり

定綱 さだなづ

左衛門尉

注五位下 さむらひごのりげ

信綱 のぶなづ

四郎

注五位下

高儀 たかのり

源政守 みなもとのまさもり

左衛門尉

氏信 うぢのぶ

京極 みやこぎ

滿儀 みちのぶ

京極

佐渡守 さどりのり

宗氏 むねうぢ

京極

宗満 むねみつ

黒田左衛門尉

少将

正安三年

八月廿五日

出家して遁法

こ号と

延文二年七十九歳とて死す

高満 たかみつ

仮前守 かきさき

五位下

左衛門尉

満秀 みつひで

高清 たかきよ

左衛門尉

宗信 むねのぶ

右羽守 みぎのうし

五位下

高教たかのり

侍前さむらい

従五位下

信長のぶなが

右馬助みぎうますけ

高宗たかむね

侍前さむらい

此間中絶こゝちゅうだつ

皇隆みげりゅう

黑田下野守くろしたのり

生田侍前なまのり

赤坂郡後界あかさかぐんごがい

後のち又また赤松あかまつ一ひとつつきき播磨はりま列りゅう姫路ひめじ又またあり

永正えいせい五年ごねん又また誕生たんにん

永禄えいりく七年しちねん二月にがつ六日にっぴつ六十七歳むそくじゅうしちさいよりより死しす

法名ほうな宗卜むねうら

識隆しつたう

義濃守ぎのうしゅ

生國攝磨姫路なむくにまほろ

時とき又小寺友兵衛政識まさのり被殺ころ于橋はしとあるありと

て威おどろををを囚とらりありしては識隆しつたうあまり

はゆはりなる軍切きりありこれゆへは小寺せうじ

のな名なこなり政識しつたう死ししては子こなりては

ととくく識隆しつたうありあるとうと

天正十三年八月廿二日六十二歳あまのしんねん

死しをを 法名宗圓ほふなむねま

孝高かうたか

小寺官兵衛せうじくわんべゐ 生國同前なむくにどうぜん

孝高かうたかを弓馬きうまの道みちより長ながト又また和歌わが此

道みちもももままりしては十七歳じゅうしちさいの時とき四海よっかいははれ

ふふれれとと思おもひひては矢やととややりりととははりりとと

亡なすすとと思おもひひては矢やととややりりととははりりとと

いと

永禄十二年赤松下野前月大軍と
をうして姫路とせじ孝高の陣
より粉骨とせしり大陣合戦
東勝を討たる威名入るあり
天正元年信長の都入とせし
本一庵とせしり信長
すみの時とせしり
信長はこれ中国とたしり
かとりし先とせしり

信長

曰三年中必勢播磨の英
より姫路の陣とせしり
とせしり
信長感書とせしり
曰四年信長播磨とせしり
秀吉より信長とせしり
使とせしり
十月は播磨に入るとせしり

今より後の教汝これぞこ見方まうたるん必かならずたぶこ
こかうれいとなり東播あづまを日よあつてふハ
孝高たか切きりりあ播あづま下げ知ちよあつてふハ
佐用さようと月命つきのみことと羽はむ孝高たか先まづよりそ
佐用さようの城しろとせむ城しろ中ちゆうあつてふハ
ぬあんこかけつと見方まうとも小討せうたうな其
日ひ小城せうじやうとのりこあそれよりと月の城しろと
こじくそ教しやく十日じふにちとあつてもあつてふハ
先まづよりそ城しろをのりかるといふあ大

よりあひち力ちからと名馬なまと成給なるとい山中やまなか
麻あさふみのまけをあつて城しろとともこあ長濱ながはま小
あ入いりたきよ信長のぶながあつて感書かんしよと給たまふ
同どう五年ごねん甲申かみせん月つき中国ちゆうごく及および紀伊きい伊予いよ淡路たんろの
賊兵ぞくへい八千やくせん余人よりのみ一川いつがはよなりと播あづまこれ
別府べつぷの城しろとせむ秀吉ひでよしあつて孝高たかより
加坊かぼうとあふ孝高たか精兵せいへい六百ろくひやく余人よりのみとつて
城しろ中の兵へいにし合あせ自みづか力ちからさきこつて
て八千人やくせんにんよあつてあつてはつてせむあ

七十余人と云ふ敵利と云ふはなほよく
返敵と信長と云ふは秀吉軍功と云ふ
して感書と云ふ

同六年九月荒木村津守謀叛と秀吉
知事の申しともいへる孝高と城中よ
はつと申すのともいへる信長よあつと
申すとも荒木きつと申して孝高は
城中よあらをいへる孝高が一族又識隆
よはつと申すといへるせんこつと識隆が

あまよりさき長政と信長へ人あつたよ
いへるいへる人質と云ふとんや荒木
が孝高と云ふは非義なりといへる
北条の人よりあつと云ふや親族理り
伏してあつたと定秀吉ふけけ冬
孝高城と云ふけけ

同七年秀吉信長の下知と云ふにて
播磨の勢と云ふは但馬固情と云ふ
先年芳古川よあつと云ふは

城を別所毛利とて海と合く謀叛を
國人皆別所なりとて秀吉をうり
ときハますいづせんころ孝高
秀吉とて先書寫山に陣
志む毛利をうり比叺宇長多が勢合
六百人と月の城とせらりしむ秀吉孝高
城とたよげんぐしめに高倉山小
陣より小勢なりいづれか加勢を信長
より孝高に長侵とせらりしむ軍と

さうしむあふよりて高倉山と捨て
書寫山とゆり

同八年之本の城とせら正月十七日別所
長治城より火とつけ自害を秀吉本
乃城とて居城とせんとも孝高がいと
この地は揚子ゆのこころなり孝高が
居城姫路八國の中よりして松海に侵
よりて別所姫路とせらりしむ人皆公正
なりといふ

曰十年秀吉毛利と征伐と倭中多松
の城と水ぜりふ一城主志あり是れ自害
と此のころ的智京初りとしひく信長
と織と花脚お来してこのやうとつぐ
孝高秀吉とすりく毛利と相後
六月十日的智と津と
曰十年秀吉栗田と征伐と孝高軍
切あり

はうへうんとまこいつりけ松孝高と
して四回中込の兵三万人といきつと
孝高より志小倉の津守ぬのはれぬ
城と責落し感書と送ふ又香春岳の
城とりこみ高橋宗と
曰十年秀吉自方筑後系より入軍と
かく薩平を征と孝高南軍とありと
て鴻津と戦ひ大いり後より鴻津
相後一秀吉攻洛の時孝高より孝高

回六郡と終ふ

同十六年五月勅命申官一任

秀吉始より軍のそりて終ふ

いともうの大志といふくはる回郡

とふらるに

同十七年一領地と嫡子長政

ゆづり隠居一入道して如水と号す

文禄元年秀吉朝鮮と征と長政

先手の大将たり

同二年秀吉如水とりて旗と終

いらく朝鮮一海軍と首割と

一と切刻の校園白秀次といさめ

渡海せしむ秀次さうら後述あり

滅亡と人々の智恵と感

文長五年

東照大権現奥列の景勝と征一終

長政先陣たり如水を先あしめ

八月入る田三成係叛の首あり

石田三成 大友義統とすりまゝ
入九列と志川りんこと如木
少く其日一豊後の速見を
けて大友の合戦一殺百人を殺
義統と生捕よと回安松は
内苑えが城なり夏末ハ垣
城なり西人ころに石田が
関ヶ原よあり城代八人殺
合戦と如木殺及戦終り勝城代

降系よおのとき 津津兵庫頭大坂
よりくは浦りる如木又よと
よりく追懸兵船二艘と
よりく九列なるを麾下に
んでおのの小倉の城と
守降系よ又筑後よ入柳川
久保の城より降系よ
加藤正平と系會一
とをく九月

大権現大坂より還暦志強ふ十月廿三日
大坂より入り

大権現よまゝんえくまのつゝ別九列
軍の次方ときつひ強ふこのさ賞
とをこかろんそと水直年のゆと
とけく辞返しとてうげと

長九年三月廿日卒とみ十九歳
龍光院と号すと

長政

吾兵衛 甲斐守 筑前守

生國接列姫路

幼少の時人質せしと信長入り

信長秀吉よあづけくとの長濱よ

あり十四歳より父とよに秀吉

よあさぐひ江別梁瀬入りり柴田合

戦のときふ初と首とる

天正十二年紀伊國の一揆和泉守和國
の城をせむ父こむれどく切と首二
うらと家

同十八年秀吉筑前入長政湯津之
日向の野部より戦ひ自力敵とまり
て大入りあはれ城破り九列たしつと
後者前六郡と給ふはそ國の一揆ふ
おより要害と城と多し常々海眼
せどと長政一と是と責殺し首城きり

しと二千あまり是と大攻り城と秀吉
大入りうらあひく名馬と給ふ

同十七年六月十七日と臣五位下り
叙し甲斐守と但ど

同十九年の冬秀吉朝鮮と征せん
わして肥前の名護屋と築く長政

を引こり

文禄元年秀吉名護屋より小西
加藤とりのいへる先より長政

と大将たいしやう五百人おほよそ大友侍おほとも佐六千人さろくせん色利
を渡いち二千ふたご人ひと鳴津なりつ兵庫ひんぐう段だん一いつ百人ひゃくにん高橋たかはし
九郎くわに杖月つぎづき三郎さんらう伊友いとも民部たみべ大浦おほのうら鳴津なりつ
又七郎またしちらう四郎しじらう合あは々々二千ふたご人ひと惣つよ合あ言こと卒す
人ひとなりなり長政ながまさ是こゝととししききくくかりかりくく
一日いちにちとと隔へ々々先陣せんじんととかか一いつ胡こ解げとと入い
金海きんかいのの城じやうととぬぬききああれれずずりり昌まさ系けい城じやうとと
責せき落らく一いつ王城わうじやう一いつ入い射しや解げ回かい王わう義ぎ列れつへ
小こげげりり小こ河か新しん長なが八はち平へい壤じやうとと陣じんととかか

王城わうじやうととささかかととみみ自じ路ろややどどなりなりははききぎぎハ
大友おほとも侍しやう佐さ次じをを長政ながまさたたをを久く重じゆう目め秀しゆう包ほう
次つぎをを小早川こぞうがわ隆たか系けい道だう筋すぢ一いつ川がわなりなりきき此
城じやうとと多たへへりり大明たいめいのの援えん兵へい數すう十じゅう万まん騎き
平壤へいじやうととせせじじ小河こがわせんせんととななりりてて救きうとと
大友おほとも一いつああふふ大友おほとものの大軍たいぐんととすすああらら
ああくく城じやうととままりり王城わうじやうとと少せうげげ入い小河こがわ
軍勢ぐんせいかかつつととううこれこれ長政ながまさがが敵てき臣しん小河こがわが
新泉しんせんのの城じやうととああららをを長政ながまさ海かい列れつよりよりととせ

耳く小西よ系會一こにしやん小西がはるこころ
 兵隊部へ向一入使と隆系が可へはり
 一とくいとく人数とけりしこよ大
 的人と一戦とこざんとし隆系支く
 急よ家開城はありべ一小とちりて
 大り戦し事を用なりこ急よ使と
 ちせくといふ家と改開城よ入く
 隆系よ系會と隆系家改ちく戦
 を災せんす大谷刑部少輔玉城より

耳く隆系と改秀包の三將と射一
 是北より引を給へこと急とけり
 てしありより大谷同道一とく玉城一
 入り数日の故大的人の兵開城の河段
 ちこして玉城とせむ隆系長改立花
 とちりし先陣や一合戦して大よ
 勝河よりたかきて死守との数千人
 玉城の兵業堵の後物解和とあり日本
 の兵も釜山浦よりあり

曰二年秀吉の下知りしよりしるしに後
将とたかしく晋列の城とせし七日の
あり城と責破ら長政先登中一
なり和漢酒く法軍攻めし
又長元年又朝鮮より入長政櫻山
と戦て万余人と切是より梁山とあり
て中城とあり
曰二年の冬大助の兵百有餘山の
城とくしむ長政法将と後をせし

殺千人と殺し大助の兵退る
曰三年の夏又小助の城とくし
む長政亦手より早稲ともいし是
とをくし小助はかくしてかく海
秀吉薨し長政改別と

曰六年六月六日

大塚現保科弾正忠盛がむとらとらひて
長政君より長政より嫁と

曰七月

大権現奥列の景勝と征し終る長政
先陣少くして野列宇教文よけく
討り石田三成謀叛のうし告あり
大権現とある侍成引いまんたりり
長政よ勝とありり大破すとのゆ
大権現小山よりとひく評定一とあり
進發よりとままり別長政とよび
ゆし先陣ととせりりともあり
他の鞍垂り馬とたまふ八月尾列

よけさ大河ととこし一攻阜とせりん
と評定も池田之た藩の被討た藩の事
亦二日よ川ととこし一攻阜とせりん
いて長政田中赤の川と渡しきれども
攻阜への向よとよはず合渡り
石田が先子攻阜後後のころし陣ととて
もく垂板り一と里斗といふきせ
て合渡と渡しと敵と追拂ひ教百
騎討た石田もた渡すくあを

あつ勢と大梯おほしきへ引ぬせりれり徳大
将まさおたかしく青野あおの原はら陣ぢん死
大槍規おほやぶの命いのちとけけり筑前ちくぜん中納言なかつなごんと
志こころくれ方かたふ引ひけり大見おほみとけり
又また毛利もうりが島しま若わか者もの吉川よしかわ被か承うけることありひ
うくに使つかを流ながること毛利もうり輝てるえとて
味方あつより引ひけりいけりよとてとけり
友部ともべの約束やくそく調しらわりと告つげたる事こと
九月十日日

大槍規おほやぶ赤坂あかさかよりけき終おひふはびとあり
ととのめこのり日ひ合戦あつせんありけきのね觸ふ
あり十五日石田いしだ守まもり長多ながた鴻津こうす大梯おほしきと
うらも開ひらけ原はらより陣ぢん死し毛利もうり輝てるえと
南宮山なんぐうさんに陣ぢんごり筑前ちくぜん中納言なかつなごんの始はじまり
松尾山まつおのさんよりあり合戦あつせんしごとくに始はじまる也
自みづから石田いしだが陣ぢんよけきかへり大おほに戦いくと
あつと合あつとこれとき中納言なかつなごんとてこれ
と合あつと合あつと切きと南宮山なんぐうさんの人

救ハ勝とありさざとありけしをる田
宇長多敷軍して四方へ分けらる天下
とくくくゆ服して

大権現大坂の城より入給ふこのとき徳
大名之恩賞とりりる長政を家國と
將しく筑前一歩とゆりり福恩と居
城よりす

同八年に位下と敷一筑前より位下
同十一年より江戸をりきと築

同十五年又尾張名古屋の城を築と
はとむ

同十九年大坂陣の時長政を江戸の
政主居と信付りし嫡子忠之と
筑前よりのがつと陣中よりまみえ
たぐまうり一歩の賞口と清丸と大坂
和後して徳大名ゆき

大権現

同二十年の夏大坂又あり

台徳院殿と洛ありまよこのころまよと長政
は信して御陣のあまにそまよ六月
七日大坂没あり

元和三年

大権現薨トキまよ下野四日光山よ
葬也

東照大権現このあがりたるまよしる長政
四中の大石と撰ひまよと救文あり
救圍よ多居とほり大和よ南海

とあり日光へそげ御廟のまよ
あま城あり

同九年

台徳院殿と洛の時長政信をなまよ
かり療養のころ報息ありあり

台徳院殿

將軍およりおほひとありなまよ
お慈切あり八月四日よ卒よ歳六十六
法名道下真雲院と号よ筑前那珂

那宗被ちよ葬れ

忠之

松平右衛門佐 生國執事形阿郡被畧
母を保科弾正忠右女

其又長十七年十二月初之後河下向し

大権現りすみえくまり同十日

よえ服し右衛門佐と号し長光のれ

腰お正ま宗の御殿指は馬馬御御意意ととりり

同十八年正月廿一日江戸よ下向し

台徳院敷り謁し御御律律

の字とよび松平れ氏とよぬりびいい

御腰おならひは四にのの御殿指とより

同二月朔日は五位下に叙せり

同十九年大坂陣に忠之を國中に人を叙せり

と率し一をとせりしじ

翌年の大坂陣に又もおしりしじ

寛永三年八月に四位下に叙せり

侍従又任じ

同九月十七日國中うちの大名よりして

居とほり江戶より廻まわり

神あり

同十四年江戶えい守しゆのふじと築きづ

長興ながさむ

黒田勘兵衛くろだ けんべい 甲斐守かいのし 母たか

元和九年筑前國うぐいのくに 萩次はぎつぐ 下屋げ 赤麻あかまの

之郡この五万石とありあつりきまりど秋月あきづきと居城きやうじやう

寛永三年八月十九日かんえい さんねん ぱちゅう じゅうくにち 五位下ごいげ 叙

甲斐守かいのし 任じ

高政たかまさ

黒田官兵衛くろだ かんべい

元和九年えんわ くにん 筑前國ちくぜん 鞍馬あま 之牧のまき 二部ふたへ 四万石

とありあり東連とうれん ちと居城きやうじやう

寛永三年八月十六日かんえい さんねん ぱちゅう じゅうろくにち 五位下ごいげ 叙

東市正とういちのまと何なんと

同十六年十一月十三日と死しと

某

甚四郎

早世はやせい

女子

井上淡路いの上のたんろちちと妻つま

女子

死しと

女子

松平右いんのたふとををと妻つまがが某某

某

可か者者

某

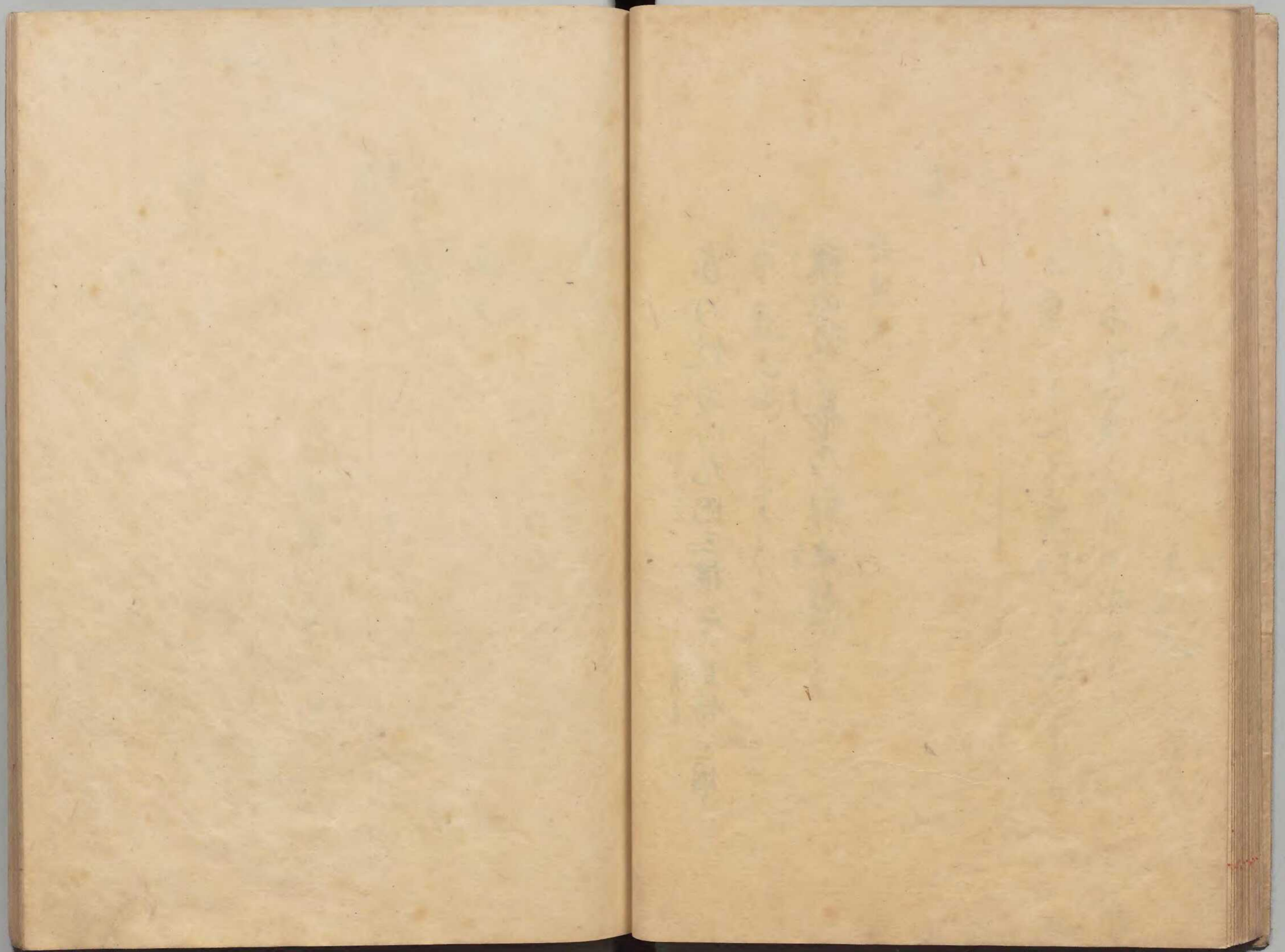
実を忠之たけゆきの子なり高政たかまさ死しをこみなり
寛永十七年三月十五日いり
上意じやういといつく高政たかまさをいたせといらる

吉兵衛

寛永十二年正月五日い初はつく
將軍家しやうぐんよりいちきくすつに

家いのい紋い友とものい丸まる四よ之の様さまといハい白しろ餅もちとい用もち

旗はたのい紋い幕まくらのい紋い申まう白しろ



間文 まや

宇多天皇うた 天智天皇てん

成頼 なりより

五位下 ごいげ

兵庫頭 ひょうごの 依本よもとの の祀 まつり

章經 あき子

兵部ひょうぶの 丞 せう

經方つらふ

源右史げん

從五位下

江州依え本もと下した位ゐ

行定ゆきさだ

可ま右ご史し郎らう右ご史し

定通さだつう

右みぎ位ゐ

定時さだとき

真ま野の源げん二に

時信ときのぶ

松まつ本もと六む郎らう

信光のぶみつ

同どう右みぎ郎らう

法ほふ名な光みつ右ご史し

信京 のぶ

孫右郎 右衛門尉

信行 のぶ

信重 のぶ

法名道信 だう

信冬 のぶ

右文新左衛門尉

法名定能 だう

山内中絶

某 なにか

豊前守 ぶ

小幡長氏とよび氏綱よけふ

法名宗三 むね

某

豊前守 ぶ

信次のぶつぐ

小原氏綱とよび氏康より治ふ
法名光林みつばやし

左衛門尉

氏綱とよび氏康より治ふ相列之浦あひつらうのうら
走水うしづみよりとひく討死うちどし法名法西はふさい

某

兵庫頭ひらぬかの

信忠のぶただ

左衛門尉

氏康とよび氏政より治ふ
法名目法めふち

信盛のぶもり

左衛門尉

母も氏田うじのト心源こころのね同太郎
か女初むすめはつ氏政とよび氏直うじのちかより治ふ

天正十八年

東照大権現より流し入るるまづ終流り

右徳院殿より流し入るる終

元和三年より病死 法名目録

信之

右清門尉 母は胡倉掃磨の女

享長三年

大権現より流し入るる終

同十二年

右徳院殿より流し入るる終

寛永三年

將軍殿より流し入るる終

康俊

豊前守

小原氏康より流し入るる終

天正十八年三月廿九日豊前守山井

乃城^{なり}一^{いち}と^とひ^ひく^く討^{うち}死^に七^{しち}十^{じゅう}三^{さん}歳^{さい}
法^{はふ}名^な宗^{そう}覚^{かく}

康^{やま}儀^ぎ

新^{あら}左^さ忠^{ちゆう}門^{もん}

氏^{うぢ}康^{やま}氏^{うぢ}政^{まさ}と^とび^び氏^{うぢ}忠^{ちゆう}よ^よし^しふ^ふ

天^{あま}正^{ただ}十^{じゅう}年^{ねん}甲^か列^{れつ}新^{あら}府^ふよ^よし^しふ^ふ

大^{おほ}権^{けん}現^{げん}氏^{うぢ}忠^{ちゆう}と^と御^{おん}對^{たい}陣^{じん}の^の時^{とき}八^{はち}月^{げつ}十^{じゅう}日^{にち}

御^{おん}坂^{さか}表^{あへ}一^{いち}と^とひ^ひく^く合^あ戦^{せん}一^{いち}討^{うち}死^に

四^よ十^{じゅう}二^に歳^{さい}

法^{はふ}名^な宗^{そう}安^{あん}

直^{ちか}元^{もと}

新^{あら}左^さ忠^{ちゆう}門^{もん}

氏^{うぢ}忠^{ちゆう}一^{いち}し^しふ^ふ

大^{おほ}権^{けん}現^{げん}開^{かい}東^{とう}御^{おん}入^い國^{こく}の^の時^{とき}一^{いち}と^とひ^ひく^く

これ^{これ}は^はふ^ふま^まの^の終^{しゆう}後^ご

台^{たい}徳^{とく}院^{いん}敵^{てき}一^{いち}し^しふ^ふと^とひ^ひく^くま^まの^の終^{しゆう}後^ご

享^{きやう}長^{ちやう}十^{じゅう}九^{きゅう}年^{ねん}大^{たい}坂^{さか}水^{すい}陣^{じん}并^{ひら}停^{てい}

忠次

忠次郎

大権規

右通院敷とよひ

將軍家より流るるまらぬ

正次

三郎九郎

將軍家より流るるまらぬ

某

吾十郎

氏照より流るる相列之衆より流るる

討死二十之歳

元重

傳右衛門

掃部頭總一尉一陣系長十

二月廿五日陣中より流るる病死

四十四歳 法名宗賢

氏重うぢしげ一ひと流りゅう之の

天正十八年十月

大権現おほごんげん一ひと流りゅう之の流りゅう之の流りゅう之の

菱あし長なが四年しごう伏見ふし見の城しろ菱あし流りゅう之の

同どう五年ごねん大坂おほさか一ひと流りゅう之の流りゅう之の流りゅう之の

とあづとあづああららゆゆ

同どう年ねん奥おく列りゅう陣じん一ひと流りゅう之の流りゅう之の流りゅう之の

元次もとつぎ

惣そう十じゅう郎らう 法ほつ名な正せい白はく

元平もとひら

惣そう十じゅう郎らう 生せい國こく氏し流りゅう

元成もとなり

秀ひで市いち

十じゅう五ご歳さい少しょう之の

右みぎ酒しゅ院いん殿でん一ひと流りゅう之の流りゅう之の流りゅう之の

病死四十二歳

法名系長

元晴

猪之助

寛永十三年

將軍家より侍人として仕る

信次

長九郎

十六歳あり

將軍家より侍人として仕る

寛永十三年に病死二十三歳

法名道忠

信次

長九郎

寛永十四年之歳より侍人として仕る

跡継ぎと存する

信高のぶたか

送酒造くわさのせう

氏政うじまさより送る

永禄十二年七月七日とんきやうくわの後列ごれつ久能くわのよ

とひく戦切せんきりあり感怍かんじやくなすなびり

たち一腰いちこしととぬりぬり家

日月にげつ房列ぶどうれつよりより籠かごひひままるる敵てきはは又また和わ

一艘いっそうああはははは討うちたたるるとと忠ちゆう切きりよりより感怍かんじやく

ななすなびびりりととぬぬりり家

日月にげつ金沃きんわく合戦あつせんののときとき敵てき二人ふたりとと討うちたたるる

感怍かんじやくととぬぬりり家

日月にげつ後列ごれつよりよりととひひくく敵てき之人てきの人いいけけ

ととぬぬりり家

日月にげつ海うみとと乃な合戦あつせん比ひ影かげななききににすすりり

感怍かんじやくととぬぬりり家

氏田うじのり勝かつ頼たのよりよりととひひくく伊豆いず國くに中ちゆう小満せうまんよ

函は渡わ敷し軍ぐんおお張ちやうとと佐さ高たかとと討うちたたるる

感怍かんじやくととぬぬりり家

梶原某とつふ色の侍を満りて
向ふころりり信高挑戦く勝利
とえは村敷ヶ所らや少りとい
敵私と繋るにうり感怖とふ
と後勝頼子五費文とふらつて
まずにみれありのら

大権現より信高とてまのり
生津村松浦よりといく凶賊横切
と小浜民部左衛門尉と信高押よせ

敵教女討死とて是と信を
りお人よれ感怖と信ふと後甲府
乃御為守りといふき此御書と小浜
民部左衛門ととい信高より信ふ
天正十二年小牧御陣の時も解法
の城よりといく九鬼大隅守兵松り
繋る信高みれと戦く討死二十
二歳

高則たかね

虎助とらのおけ 生回駿河まわが

大権現おほごんげんより流ながるるてまひまひに於おて三十二歳
少くひま病ひま死し

真澄まみ

虎助 生回まわ衣い袴はかま

七歳しちさいふふ〜

大権現おほごんげんとよよひ

右みぎ酒さけ院いん殿どのよりよりままみみええききららくくままつつりりそそ
ののらら勤いん仕しとと

綱信つなぬぶ

若わか狭さ守まもり

小こ條じょう氏し照ていりりははくく人ひと老らうここなならられれらら小こ條じょう
氏し政せい經けい信しんととよよひひ〜
信しん長ちやうりりははくく〜
之これ列れつ畧りやくととよよひひ時とき

大権現ありり湯そのてまじりの後

大権現えん開き東とう御ご入い小せうののときき西せい尾び隠いん改かいり

命いのちりり總そう位いとと右みぎかかららああままささよりよりははく

ししくくままりり記き

享きやう長ちやう十じゆ四し年ねん七しち十じゆ四し歳さい少せうくく死しとと

法ほふ名な休きゆう后ご

氏うぢ信のぶ

氏うぢ部ぶ少せう輔ほ

頼より次つぎ

十じゆ右ご束たづのの尉べい

くくののハハ小せう條じょう氏うぢ照しょうりりははく

大権現えん開き東とう御ご入い回かいののときき父ちち總そう位いとと同どう

りりししごごさされ

大権現ありりりははくくててままじじりり記き

信のぶ繩づな

七しち郎らう兵へい束たづ

台榭院殿とよび

將軍家より流るるてまのり

皇^{まげ}總

市兵衛

將軍家より流るるてまのり

皇^{まげ}信

忠^{ちゅう}左衛門尉

生^む回^{わい}氏^し茂^し

十四^{じゅう}歳^{さい}より

大^{だい}権^{けん}現^{げん}より流るるてまのり

台榭院殿より流るるてまのり

元和九年より

將軍家より流るるてまのり

寛永十二年より清^{せい}納^{なつ}戸^と殿^{どの}なる

皇^{まげ}三

長^{ちやう}兵^{へい}衛^{ゑい}

將軍家より侍人きくまひり

某

兵部少輔

小原家より侍人

法名宗見

元次

在在東門

大権現より侍人きくまひり

法名淨祐

元重

在在東門

法名安清

元勝

在在

寛永四年正月より

將軍家より侍人きくまひり

某

監見
物あり

家こゝ
乃
紋え

目より
同り
様い

● 信次のぶつ

間文まぶん

美里首信濃みやまのぶのぶ

生國と総なまくにとそう

義昭よしあき一いっ信のぶふふ四よ氏うぢハハ氏うぢ田でなりなりののら
とと総そうふふ美里首みやまのぶのぶにに任にんをを故こよよ氏田うぢでと
改かへくく美里首みやまのぶのぶここ号ごうとと

直信 ちかひ

美里若兵衛尉 生國同前

義昭 よしあき 一 いつ 氏 うぢ

永祿三年八月 ひい 病歿 ひがう 八十歳

信正 のぶただ

弓矢助 まきや 左衛門 生國下総

母方 ははのうぢ 此親父 このおや 弓矢主水 まきやのぬすみ 依 よ こ こ の の 心 こころ 際 ぎは

氏政 うぢまさ 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 甲列 かぎ 信玄 のぶひら 一

つ つ 其子 そのこ 弓矢 まきや 主水 のぬすみ 酒造 のさけ

大権現 おほごんげん 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 甲列 かぎ 信正 のぶただ 外戚 けいせき

一 いつ 家 いへ 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 美里 みさと 若 わかし 兵衛 べゑ 尉 ゑ 一 いつ

一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 十 じゅう 三 さん 歳 さい 一 いつ

台酒院 たいしゅゑん 殿 の 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 一 いつ

將軍 しやうぐん 殿 の 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 一 いつ 氏 うぢ 之後 のち 一 いつ

寛永十八年三月六十七歳 かんゑいじゅうはちねんさんがつにじゅうしちさい 歿 しよ

正次 まさつぐ

徳右衛門 生國茂茂 むさし

寛永十二年より

將軍家より

信重 のぶあき

次郎兵衛 生必同前

寛永十六年より

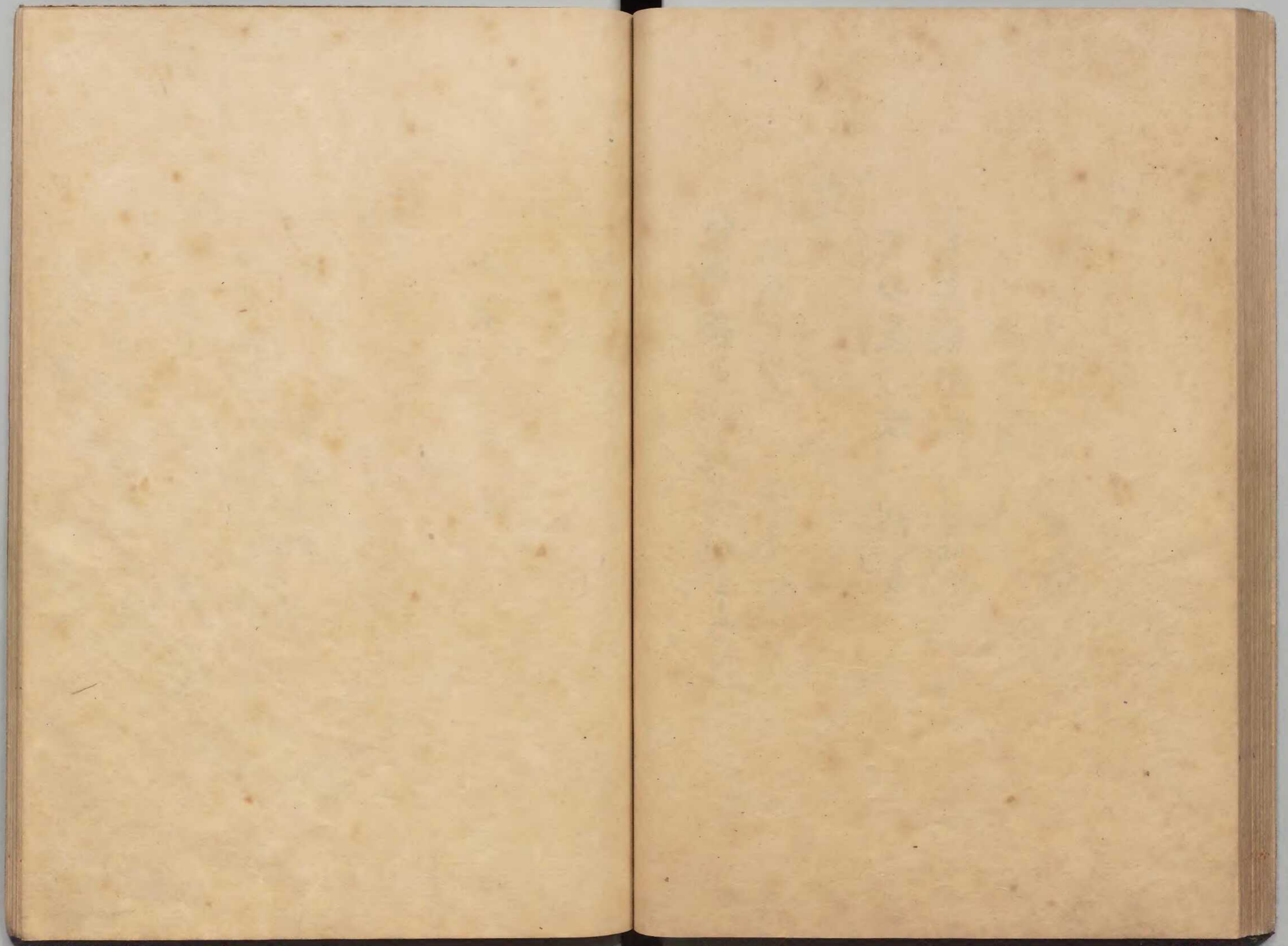
將軍家より

氏田家 うぢのの紋

割菱 わりびし

弓矢家 ゆみやの紋

四目 よもひ 縁 ゆかり



正堂

間宮

氏部

生回相摸

小原氏也又法久其後りしごと

大権現又法久しきまつり大御妻と

法とむ六十五歳しき死す

法名家林

正秀 まさひで

庄五郎

生回日家

実 まこと 依田大膳 よだだざん 子 こ なり 正室 まさむね 嗣子 ついでこ か

き き ゆ ゆ へ へ よ よ 出 で 産 う ん ん 子 こ と と

元和元年 わねん 大坂御陣 おさかごじん へ 侍奉 ざむらい して

討死 うちし 三十一歳 さんじゅういちさい 法名 ほうな 常秀 じょうしゅう

正勝 まさかつ

庄五郎

生回日家

右近衛殿 みぎのけのとの と と よ よ へ

將軍家 しやうぐんけ へ 侍 ざむらい する する 御 ご 成 なり 候 けう

と と 侍 ざむらい する する

勝家 かつや

八幡 やちばん 生回日家

將軍家 しやうぐんけ へ 侍 ざむらい する する 御 ご 成 なり 候 けう

と と 侍 ざむらい する する

家乃紋
四ろ月ろ陸い

清政きよせい

方兵衛かたべゑ

● 清定きよさだ

本村ほんむら

孫八郎まごやちろう

生回冬河なまぐるふゆか

清康君きよかみより
清之君きよのより
清之君きよのより
清之君きよのより

大権規とよび

台漣院敵

將軍家より清長へ

清長

孫八郎

十六歳

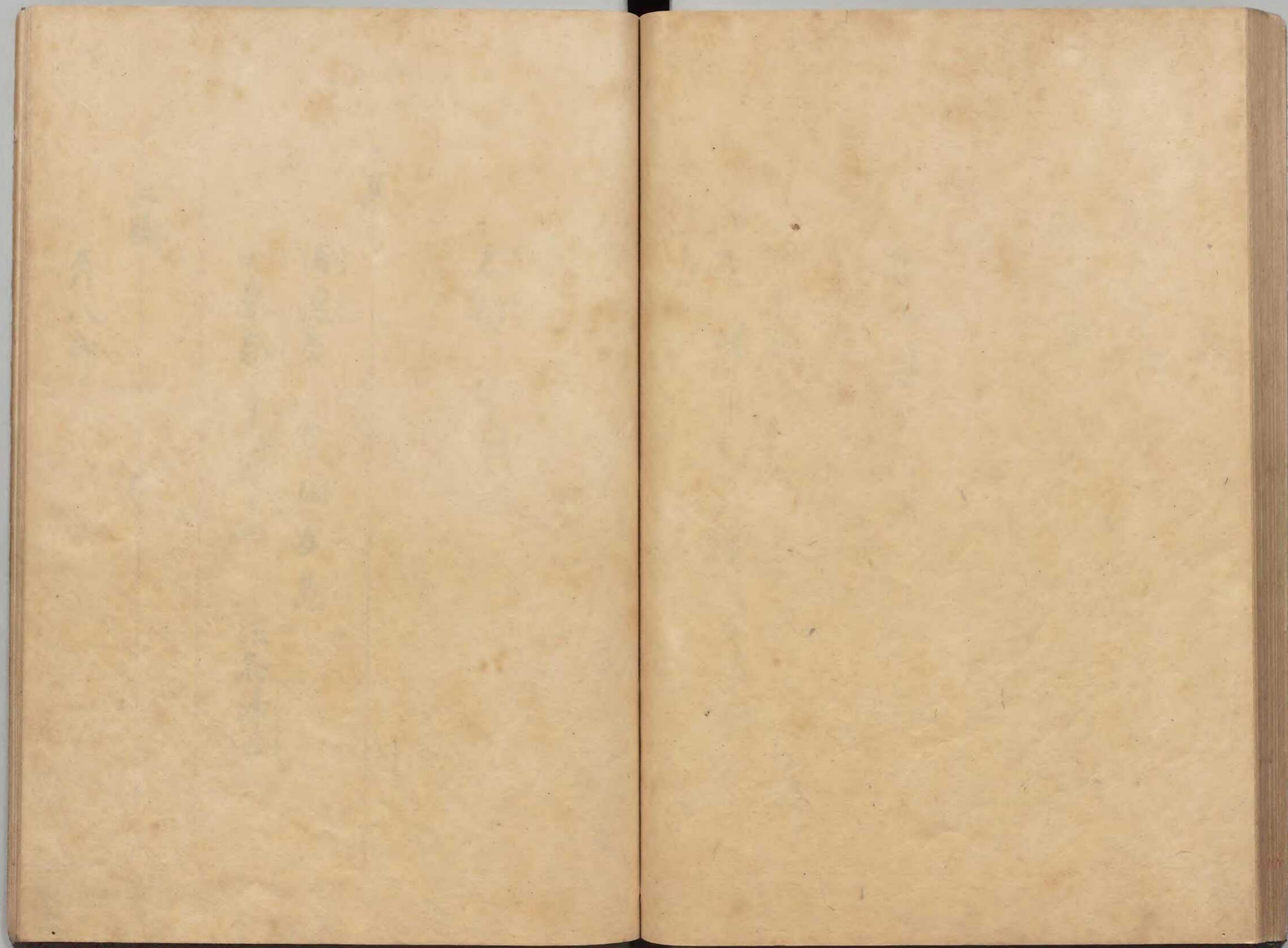
台漣院敵小清長へ

とたか

信成

將軍家より清長へ

家乃紋



● 某

本村

信濃

生國

小糸

法名

良盛

彦八郎

享長十九年

大権現びんより法し久くくくすすののち
病び死し

良り總そう

彦八郎

右みぎ法し院いん殿どのとよび

将しょう軍ぐん家けより法し久くくくすすののち

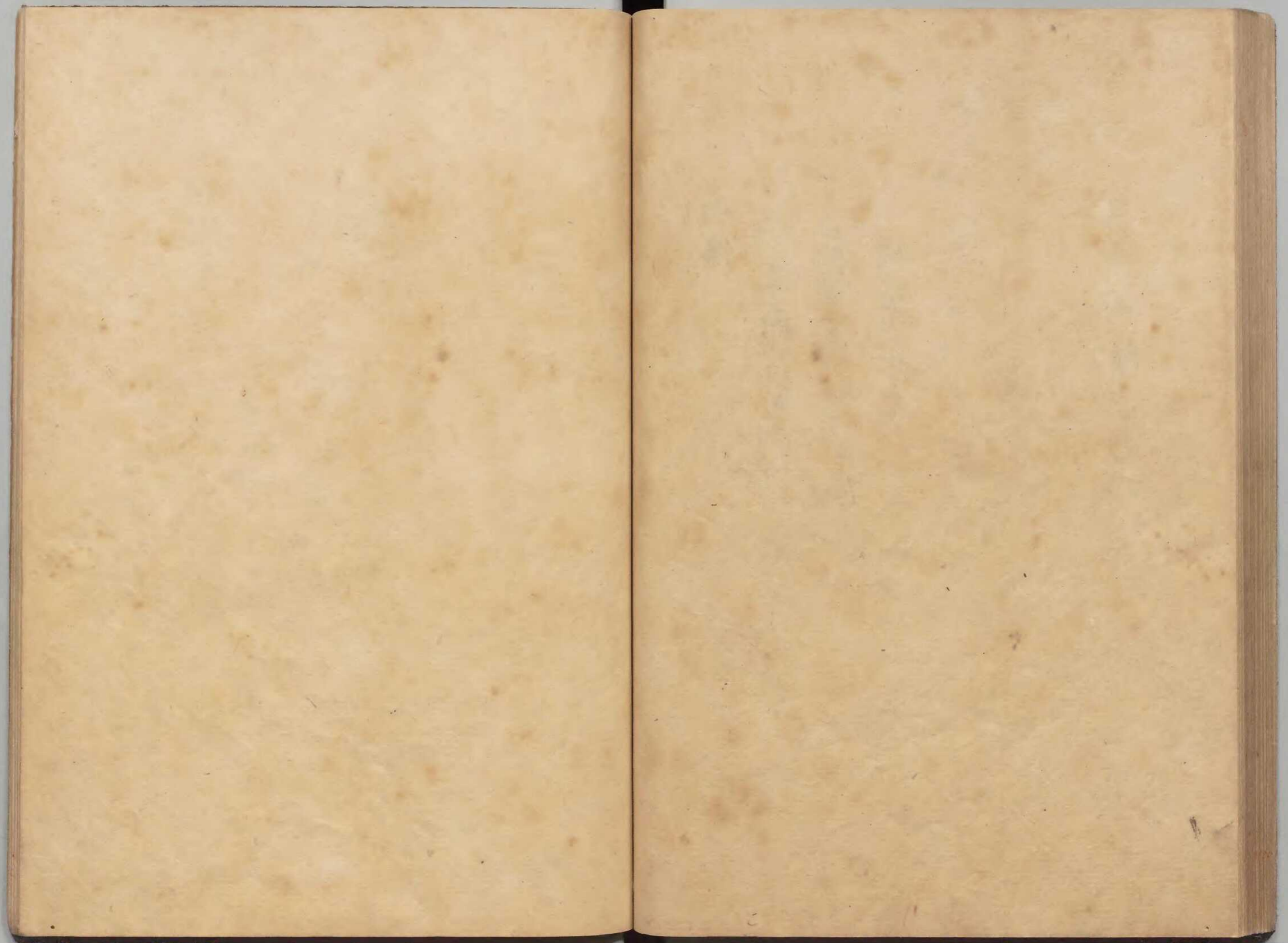
威い信しん

五ご郎らう右みぎ衛ゑ門もん

右みぎ法し院いん殿どのとよび

将しょう軍ぐん家けより法し久くくくすすののち
役やくとしとむ

家いへ乃の紋もん字あざ目め録ろく



本村

● 長忠 ながただ

源右衛門 生國近江 あまのくに

長正 ながただ

広右衛門 生國伊勢 いせ

長元元年より

台徳院殿より清久きまらるる
寛永三年歳六十四よりして記す
法名いん更長しん

長者たかし

庄右衛門 生國氏い

享長十七年より

大檀越だいだんとよむ

台徳院殿

將軍家より清久きまらるる

家乃紋よつ四目し錯さく



● 勝重かつしげ

本村

惣右衛門そうえもん

生國山城なまくにやま

秀吉ひでよし下流しもりゅう

法名宗奇ほつなむねかつ

勝正かつしげ

惣右衛門

生國日記

大久保相模守と先容少して

大権現より清くくまらぬ時より勝正

本領の地越たぬふ 法名宗光

勝清

惣右衛門 生四回あ

安長十九年大坂御陣の元勝清

として淀川を乃人と禁びじび

つき 柏原源兵衛門歩卒二十人と率

まゝく大坂の城へしんと勝清路と

彦あは越城より板倉伊勢守と園よ

達まうらら二條の城へといく

りあされ

大権現より湯へとまらり 鷹さる

くぬりれあり

翌年御陣のころ友を和泉守淀の

四城より居る御膳と越せん

大権現午時勝清が宅より休きぬ

其のうちに二條の城をとひく加増り
きぬり又淀川をはるる此の書の船役と
はとむ

晴吉らう

孫次郎 生國同前

台酒院殿とむ

將軍殿へ湯へとまひ

家乃紋階子ご



吉真ノ上左ノ子孫ノ事

本村

●吉次

孫三郎

後九郎左衛門三郎生國三河

大権現ノ法ノ事

吉真

之右衛門

生國同前

大権現ノ流ノ事ニクマリテ

吉正

之右末門 生四回前

延文長二年

台徳院殿ノ流ノ事ニクマリテ

元和四年ノ死ニ歳二十九

法名 定清

久正

之右末門尉 生四回前

台徳院殿ノ流ノ事ニクマリテ

吉房

之右末門尉 生四回前

將軍殿ノ流ノ事ニクマリテ

吉童

沐六兵衛 生國氏茂

実也竹尾傳九郎子なり幼少より

吉正茂くみこことそと

將軍教りしは之きくまひ

寛永九年九月小十人組となり

元正

源右郎 生國同前

台徳院教りしは之きくまひ

陣又傳也

大坂又陣又同付となりて傳也

元和三年歳四十八より病死

法名 宗光

勝元

基九郎 生國氏茂

台徳院教りしは

將軍家より法久きくまの如
寛永六年四十回歳少く病死
法名宗正

元寛

甚右衛門 生四回前

寛永七年

台漣院殿とよび

將軍家より法久きくまの如

保元

猪右衛門 生四回前

安永十八年

將軍家より法久きくまの如

家乃紋四目絡

指四紋は家地より白一文字

